メルビル・デュイの「起原論文」について

——デュイ分類法の創始とその歴史的意義——

小　倉　親　雄

I

メルビル・デュイ（1851—1931）はその晩年，彼が図書館界に試みて来た数多くの事績を振りかえって，その発端となったのは DC（デュイ十進分類法）の創案であり，一方また最も満足の情をもって回顧されるものは，図書館学教育の確立であったともらしている[1]。DC の素案が彼の脳裏に浮び上ったのは1872年，そしてまた，コロンビア大学の中に，世界における最初の図書館学校を開設したのが1887年のことであった。今日，デュイへの回想は，近代図書館活動のほとんどあらゆる分野において，その基を切り拓いて行った開拓者・創始者，“父”としての姿においてなされている[2]。しかしながら彼にとってはあらゆる事績の出発点であり，延いては図書館人としての生涯を決定づけ，他の諸活動の源となったものが，この新しい分類法の創案にあったとすれば，彼が“図書館分類法の父”とされていることの意味は，その図書館活動全体に対して深いつながりもつばかりではなく，その後における世界の図書館発展の上にも，また重要な意義を担うものである。

II

デュイが‘アラビア数字を使っての十進法’(arabic decimal) という形で，彼の分類法について，一応の解決点に到達したのは，1872年もすでに押し迫った頃のことであろうと推定される。その間のいきさつは，彼自身によって再三にわたり語られており，きわめて感激的な瞬間として想起されている。それはある日曜日のこと，その学んでいたアマスト大学（Amherst College, Mass.）の礼拝堂では，時の大学総長スターンズ（William Augustus Stearns, 1805–1876）による長い説教が続けられていたときであったという。すなわちその最中，突如として彼の脳裏に上述の解決策がひらめき，感激のあまり，あやうく椅子から立上って“*Eureka!*”とばかり，今に

---

1) 拙稿「メルビル・デュイと図書館学教育」　京都大学教育学部紀要第12号　1966年3月　p. 62。なおデュイ分類法は，“デュイの十進分類法”(Dewey's Decimal Classification)，もっと一般的には，“デュイ十進分類法”(Dewey Decimal Classification)，あるいは単に“十進分類法”(Decimal Classification)，略して“DDC”または“DC”と呼ばれている (Dewey Decimal Classification and Relative Index. 17 th ed. *Editor's Introduction*)

2) 拙稿「メルビル・デュイの図書館思想とその形成」図書館界　第19巻(第1号) 1967年(5月) p. 16.

も叫び出しそうな衝動に駆り立てられたことを伝えている[3]。

それより約半年，1873年5月8日彼はその分類法について，構造と使用法，利点，さらにはアマスト大学図書館への適用を提案したものを3つの文章にまとめ，一括して大学当局に提出したが，これがデュイ分類法の創始を正式に告げた最初の文献であり，それ故に“三つの起原論文”(*Three Genetic Papers*)[4] と呼ばれ，現に貴重な資料として，大学資料室（Amherst Archives）に保管されているものである。DC 誕生の年を1873年とするのも[5]，実はこのような事情を基にしているものである。

この3つの論文は全体で1,800余語，その半数余りが“利点”（*The Merits of the System*）の解説にあてられ，“構造と使用法”（*Library Classification System*）がこれについで約520語，“適用”（*1ts Special Adaptation to our Library*）に関するものが最も短かく，350語程度にまとめられている。すなわち彼がこの中で最も力をこめて執筆しているのが，この分類法の利点についてであり，冒頭に

> 私は自身，この国の大きな図書館で用いられている各種の分類法と，つぎに，海外のライブラリー・エコノミーに関して入手することのできたいろいろな事実とを，相当広範に検討した結果，いまここに提案する分類法が，現に用いられているどれよりもすぐれたものであるという考えに導かれるようになった

と記し，順次その理由を掲げ，説明を加えて行く形で筆をすすめている。

III

この DC第16版（1958）の編さん者であったカスター（Benjamin A. Custer, 1912–　）は，この“起原論文”が大学当局に提出されたときの消息に触れて，‘ほんのまだ学生補助員にすぎなかったデュイから，この革命的分類法を受けとって，大学当局はいささか驚いたに違いない’と記している[6]。“学生補助員”（student assistant）というのは，デュイが学生の身分のまま，アマスト大学図書館の補助職員として勤務していた当時のいわば職名であった。すなわちこの大学に入学（1870年9月）して2個年をすぎ，ようやく将来に対する方向が一元化を見，結局教育にたずさわって行くことをもって生涯の道と定め，その教育の中でも，学校教育とは別の面，すなわち今日でいう社会教育・成人教育に献身することを決意したとき，彼の心に大きく浮び上って来たのが公共図書館（public library）であった。実にデュイこそは，いまだ成人教育という語が広く用いられるようになる1世代以上も前から，はっきりその方向を見極め，逸早くその発展に心をくだいた唯一の人物（a whole-board of adult education）であった[7]ことが特記されて

---

3) Dawe, George Grosvenor, *ed.*: Melvil Dewey; seer: inspirer: doer 1851–1931. N.Y., Lake Placid Club, 1932. p. 165.
4) Dawe, G.G.: *Ibid.*, p. 318–324.
5) Rider, Fremont: Melvil Dewey. Chic., ALA., 1944. p. 29. *American Library Pioneers, VI.*
6) Custer, Benjamin A.: Dewey Decimal Classification and Relative Index. 16 th ed. *Editor's Introdction.*
7) Williamson, Charles Clarence; Melvil Dewey; creative librarian. Urbana Univ. of Ill. Press, 1943. *Illinois Contribution to Librarianship, No. 1, p. 6.*

いる。ただ彼の場合におけるその成人教育は，公共図書館をその中核とした形で描かれたものである。そして学生としてのデュイが，第3学年に進むと同時に（1872年9月），“学生補助員”という身分の下で，大学図書館の中に仕事を求めて行ったのは，図書館の内部に直接身を置き，自らその体験を重ねて行くことによって，勉学計画の一部にして行こうとする積極的な意欲に基づくものである。“起原論文”はそれから約9個月後の所産であり，3年生の課程がやがて終りを告げようとする2個月程前のことである。大学当局のおどろきというのは，いまだ21歳には満たない，しかも正規の職員でもない学生によってこの提案がなされたことと，しかもそれが，この大学創立（1821）以来，正しく半世紀にわたって存続して来た方法を結局は根本的に変革するものであったばかりでなく，同時にヨーロッパにおいては過去長い歴史を通じ，アメリカにおいては従ってその創始の時より，伝統的に維持されて来た方法をも根底から揺がすものをその内容としていたからである。

また“革命的な分類法”（revolutionary classification）という言葉は，彼の創案に係るものを，それ以前の方法と比較した場合，きわめて創意に富むものであったという意味で与えられたものではない。カスターによっては，その程度の意味でたとえ用いられているとしても，事実は正しくその言葉通りの影響を与えるものとなったのである。ペティ（Julia Pettee, 1872–　）によると[8]，デュイのものは要するに“相対的分類表”（“relative” scheme）であり，この相対的なものであることによって，実に過去1,000年の齢を重ねて来た伝統的な方法を，根本的にここで改変してしまったという意味において，正にそれは“革命的”なものになったと記されている。デュイ分類法の機能，その歴史的意義に触れた，極めて直截な表現として受取ることができるであろう。

この事情は，DCの第11（1922）・12版（1927）の改訂を成し遂げたフェローズ(Dorcas Fellows, 1873—　）によって，さらに敷えんした形において語られている[9]。すなわちここでは，デュイのものが，そのもつ長所，わけてもその構造における単純性（simplicity）の故に，国際的に広く普及を見たことの意義は非常に大きなものであるが，しかしそのこととは全く別個の面において，しかもそれと比較した場合，本質的な点で，はるかに重要性を担っているほかの事柄があったことに言及されている。そしてその事柄というのは，‘当時ほとんど普遍的に行われていた書架上における固定式配架法（fixed location on shelves）を，相対的配架法（relative location）の原則に置き替えてしまったこと’であった。こうした意味においてはデュイのものが実はその最初であり，従ってその後に新しく創られて来た分類法は，たとえその記号法（notation），全体としての構成その他の面で，どのような相違をもつものであるにせよ，相対的配架法をその本質的要素としている点においては全く同一であり，いずれにしてもデュイのものをその軸として，

8) Pettee, Julia: Subject headings: the history and theory of the alphabetical subject apporoach to books. N.Y., Wilson, 1946 p. 23, *foot-note 2*.

9) *Library Journal*, Vol. 57 (No. 3), 1932 (Feb. 1), p. 152.; Dawe, G.G.: *Ibid.*, p. 176.

時代は大きく旧来の固定式から相対式配架法へと転回して行ったことの，如何に大きな役割をもつものであったかについて書き添えている。すなわちベティによっては，それ以前の方法との対照においてその歴史的意義が，フェローズの場合は，同時にまたそれ以後に現われて来た各種分類法との関連において，ともにその歴史的意義が捉えられている。デュイ分類法以後のものと言えば，その多くは，デュイのものを意識し，それにあき足らず，あるいはそれに対立するものとして作製されて来たといってよい。分類法そのものの本質的な優劣ということになれば，それはいわば永遠の課題にも連るものがあるであろうが，そのもつ歴史的意義において，デュイのそれが如何に大きなものであったかを，以上2人の言葉はよく指摘しているといえよう。

Ⅳ

しかしながら，デュイにおける DC 創案の事情と，以上のような歴史的意義との関係は，必らずしも正しく理解されて来たとは限らない。トウバー（Maurice Folcom Tauber, 1908—　）によると[10]，その創案の動機は，当時における図書館のほとんどすべてが採用していた固定式配架方式（fixed location system）がもつ非能率（inefficiency）を打ち砕いてしまう（counteract）ためであったとされている。すなわちデュイにおけるその直接動機を，伝統的でしかも普遍的な配架方式の打破に発すると解するものであり，これに対して上記のカスターは，逆にそれを至って身近かな現実に求めている。すなわち彼はデュイにおけるその直接動機となったものは，当時アマスト大学図書館の内部が呈していた“混乱”（confusion）の実情そのものであったとし，それを整備し，組織化しようとする積極的な意欲に駆り立てられずには到底いられなかったであろうと述べ，ここではデュイに具った生来の為人にその多くのものが帰せられ，そのため引き続いて彼は，デュイがまだ5歳のとき，母の食器室（pantry）を体系的に配列し直した挿話を書き添えているほどである。もちろん彼がここで“混乱”とのべている言葉が，具体的には何を指しているかを，その短い表現の中から正しく汲みとる訳には行かないが，おそらくは，図書の蔵置形態，特にその配架の実態を意味するものであろう。

以上のような理解の仕方に対てしラモンターン（Leo E. LaMontagne）は，デュイ分類法を図書配架の実際に使用するようになったのは，いわば“副産物”（by-product）にすぎず，このことを当初におけるデュイの意図と照し合わせて見た場合，それはむしろ“皮肉な”（ironic）結果となってしまったものであると指摘している[11]。すなわちデュイがその分類法を創案した当初の目的は，目録や索引を作製して行くためであって，図書配架の実際に適用することを企図したものではなかったとし，ただその分類法が非常な発展を遂げ，同時に広範に採用されるようになった結果，あたかも図書館分類法の主要目的は，図書それ自体の配架位置を設定すること（phy-

10) Tauber, Maurice Folcom & *others*: Technical services in libraries. N.Y., Columbia Univ. Press., 1955. p. 19. *Columbia Univ. Studies in Library Service, No. 7.*

11) LaMontagne, Leo E.: American library classification, with special reference to the Library of Congress. Hamden, Conn, Shoe String, 1961. p. 7.

sical location）であるかの如く考えられるようになってしまったこと，こうした結果は，デュイ自身にとっても全く意外な成り行きであったとするものである。

ラモンターンのこの言葉は，以上のような結果がデュイ自身にとって，当初予想だにしなかった大きな影響を歴史の上に留めることになったことの重要性に言及しているというよりは，むしろ旧来における図書館分類法に対する考え方が，根本的にここで変って来たことのもつ，より大きな意味を述べようとしたものである。彼によると，デュイ以前に在っては，分類法のもつはるかに高い重要性は分類目録（classed catalog）の方におかれていて，分類される図書に対してではなかったのがその実情であり，デュイ分類法の発展と普及とが，図書館分類法の主要な機能を，この目録に対するものから，図書自体の分類配架という全く逆方向に持って行ったというのである。すなわちここでは，トウバー教授の解釈とは全く別の立場において，デュイ分類法創始のいきさつが捉えられている。

たしかにデュイは1876年，ラモンターンが触れているように，その分類法は，もともと目録を作製したり，あるいはまた索引をつくったりする目的のために考案されたものであったこと，そしてただその分類番号を図書や小冊子類に与えて，書架上に配架して見た結果，それが非常に有用であることを発見するに至ったと述べている[12]。この言葉は，彼が直接の目的としたのは，従来一般に考えられて来たのとは異って，目録作製用としてであり，図書配架の実際に適用するためではなかった事情を伝えているものである。

彼がここでいう目録は，いうまでもなく主題目録であり，もっと直接には分類目録である。従ってこの目録を編成して行く上に必要な分類表の創案がその直接動機に培ったものであるとすれば，そこには彼が終始固執し続けて来た分類目録に対する強い信拠性が介在していたのを察知することができる。すなわちデュイは，1883年コロンビア大学図書館長に迎え入れられるに及んで，その成し遂げた多くの業績の中で，分類目録の作製，またそれを補うものとしての著者および件名目録は，たしかに大きな事業であったし，ついで1889年ニューヨーク州立図書館長に転じた以後において，持に力を注いだのもこの分類目録の整備であった。そしておそらくはこれが当時にあっては，もっとも規模の大きなものであっただろうといわれているほどである[13]。しかもそれは，この国の場合，目録形態としては対照的な姿をとる辞書体のそれが広く採用されて行き，自然分類目録の方は次第にその姿を消して，ついに辞書体目録の方が，蔵書に接近して行くための標準方法としての地位にまで発展して行った背景の中で進められたものであった。デュイはそのような一般的すう勢の中に在っても，分類目録の辞書体目録に対する優越性を信じて疑わなかった人である[14]。

---

12) Dewey, Melvil: Decimal Classification and Subject Index, 1876. *Public Libraries in the United States of America... Pt. 1.* p. 623.

13) 拙稿「件名標目——その歴史的背景と構造」学術月報　第19巻第11号　1967年2月。

14) Mills, J. A: Modern outline of library classification. 2nd impression. Lond., Chapman & Hall, 1960. p. 57. *op. cit.*

V

デュイにおける分類法の創案が，分類目録の作製にその端を発しているとすれば，それはとりもなおさず，当時におけるアマスト大学図書館の実情こそ，さらにその根原に培ったものと見なければならないであろう。この大学はもともと，マサチューセッツ州，特に西部における長老教会派および組合教会に所属する熱心な信徒たちによって，1815年に創設された“アカデミー”(academy) にその源を発し，1821年“カレッジ”としての改組を遂げ，今日に及んでいるものである。そしてデュイがこの大学に入学した翌1871年をもって創立50周年を迎えたが，1875月6月12日現在における蔵書数は3万0,406冊，その外には学内に所属している2つの団体 (*college societies; Alexandria & Athenae*) が所蔵し，大学図書館への併合が予定されていた図書が8,127冊，合して3万8,533冊であり，それ以前の15個年間における累年増加冊数は，平均して940冊であった[15]。リチャードソン (Ernest Cushing Richardson, 1860–1939) が，DC初版 (1876年刊，総ページ42) 刊行のことに関連して，この分類法は，蔵書4万冊以下の図書館を対象に考案されたものであったとしているのは[16]，このような実情をその背景としているものである。

またこれらの図書が書架上に置かれていたその実情は，書架を大きく歴史 (history)・哲学 (philosophy)・科学 (science)・神学 (theology) など，きわめて大雑把な主題 (general subject) に配分して数字化し，そのもとに，個々の書物をただ番号順に配架して行く方法であった。いうまでもなくこれは固定式配架であり，その中でも至って単純な形態である。すなわち上述の主題別に，書架の順番をたどりながら，書物はただ受入順に番号が与えられて行くだけで，それ以上の細分は行われず，従って書架区画 (tier)，書だな (shelf) によって記号を別にすることさえも考慮しない，いわゆる“数字配置”(numerical arrangement) の方法によったものである。ブラウン (James Duff Brown, 1862–1914) によると，この方法は，かって‘大多数のイギリス公共図書館において行われていた最も一般的な方法’であり，歴史的に言えば，“数字配架式”(numerical location system) に引きつづく次の段階に位置するものであるという[17]。すなわちイギリスにおいて，公共図書館運動が始ったばかりの初期段階にあっては，特別の教育や訓練を受ける機会もなく，何んら拠るべき科学的方法も持ち得なかったことから，最も安易な措置として採られたのが，全蔵書を1つの累進番号 (progressive number) の下に置くというこの“数字配置”の方法であった。しかしながら，ブラウンものべているように，この方法には，図書館員の頭脳的消耗を極度に軽減し，空間の不経済を除去するという2つの観点からいえば，たしかに

15) Amherst College, Amherst, Mass. 1876. *Public Libraries in the United States of America* (*Chapter III, College Libraries*), p. 75–77. 以下アマスト大学における配架・目録の項はこの文献による。

16) Richardson, Ernest Cushing: Classification; theoretical and practical. 3rd ed. N.Y., Wilson, 1930. p. 157.

17) Brown, James Duff: Manual of library classification and shelf arrangement. Lond., Library Supply Co.. 1898. p. 13 (*Section 5*)

‘否定しがたい利点’をもつものである[18]。

いずれにしてもこの方法による場合は，そのもつ内容には相互に全く関係がない形で書物は書架上に混在する。“数字配置”の方もまた，大雑把な幾つかの主題が採り上げられ，その主題をもって類（classes *or* divisions）の横成が行われてはいるものの，各類の中は受入順という偶然的順序に基ずる累進番号であり，ここでもまた類の内部における各種主題の図書が混在した姿を執る。1870年代におけるアマスト大学図書館の実情は，正しくこの“数字配置”によったものであったが，しかしこの方法を執るに至ったのも，1855年から数えてほんの数年前のことにすぎなかったという。おそらくそれ以前においては，より単純な“数字配架法”に拠っていたものであろう。

さらにまたこの大学図書館の目録について言えば，この大学が“カレッジ”としての再編成を見た1821年から34年後（1855），1万2,000冊の蔵書に対し，著者名による語順目録（alphabetical catalogue of authers）が刊行されており，これは個々の図書に対して，書架番号と，その書架内に占める図書番号との2つを付記したものであった。これを最初のものとして，9年後(1864)には，1855年以降の増加分に対しては，カードによる著者目録を追補して行く方針が樹てられてデュイの時代に及び，その間創立50周年を迎えた1871年には，1万4,300冊に対する同じく著者目録が，補遺として印刷に付されている。結局この大学は，種類としては印刷冊子目録とカード目録，形態としては著者目録を採り，従って主題を基にした目録の作製を考慮することなく，1870年代に及んだということができる。デュイがこの図書館の中においてまず嘱目したのは，実はこのような目録の在り方に対してであった。彼が“起原論文”の中で，‘すぐれた主題索引をもちたいというわれわれの大きな要望’と記しているところによっても，その一端をうかがうことができる。

1876年連邦政府印刷局から刊行された“米国公共図書館報告書”の編者（S.R. Warren & S. N. Clark）は，1874年アマスト大学図書館が，全く新しい計画にもとづいて，著者および主題の双方から，中央館目録（general catalogue）の作製に著手したことと，同時にまた，この年の卒業生であるデュイが副館長に任命されて図書館業務に専念し，特に新しい目録作製の任務に携わることになったことを伝えている。新しい計画というのはいうまでもなく，従来の著者目録に対して，新たに主題目録を追加して行くことであり，ここでは新計画とデュイの大学卒業・図書館業務への専念との2つを至って自然に結び合わせた形で記述されている。デュイの大学卒業はこの年の7月であるが，しかし新計画そのものは，その時期を待たず，それより1年余り以前からすでに着手されたものであった。

VI

デュイは，彼が“起原論文”の形で提案した事柄が，1873年5月アマスト大学当局によって採択されたことに関連して，直ちにその年，図書館の全蔵書を，新目録（new catalogue）に移す

18) ——, p. 15 (*Section 2*)

作業が開始されたことを伝えている[19]。すなわちこの大学におけるデュイ分類法の適用は，分類目録の創始と結びつき，またこの目録を作製し，それに対する索引を準備することの必要を痛感したところに，彼の分類法創案における当初の目的があった以上，この作業開始は，その生涯における正しく歴史的な出来事と言わなければならないであろう。すなわち彼の構想がここで始めて実地に根をおろすことになったからである。そしてさらに図書配架の実際にそれを適用して行くことは，ラモンターンが指摘しているように，いわばその副産物であり，その間には，図書の実際配架に対する，カード目録組織の部分的な適用という過程が介在する。

デュイはまた，その“論文”の中で分類法の起原（origin）に触れ，それが，当時最もすぐれたものとして一般に認められるようになって来たカード目録方式（card catalogue system）を慎重に研究した結果に負うところが多大であった点に言及している[20]。そしてこの言葉は，彼の分類法の利点として，それが建物とか，書だな等々のどのような変更に対しても，最初に記載した書架記号（press marks）を何んら変更することなしに使用できる点を挙げ，その意味において，当時用いられていたどの分類法にも優ることを強調した語句に引き続いて述べられているものである。そしてその利点の根本をなしているものについて，

> それぞれの図書は，書だな（wooden shelf）に従ってではなく，そのもつ主題により，他の図書に対しては‘相対的に’(relatively) その位置が与えられる。従ってその書物が同一著者によって，同じ主類について書かれたものである限りにおいては，場所の移動（removal），さらには目録の改訂（recaloguing）に際しても変更さるべきものは何一つ存在しない

と記し，それを一に相対的配列の原則に拠ったものである点に帰している。彼が，‘古い方式に優るカード目録の利点をそのままに’その分類法は具えているとのべているのは，古い方式すなわち冊子式・集葉式・加除式目録のもつ固定的性格に対するカード目録の可動性とその機能とを，そのままに反映したものとして，彼の分類法についての構想が培われていることを物語るものである。その適用が，とりあえずアマスト大学における分類目録の作製として具体的な第一歩を踏み出したと解し，それを“起原論文”の提出から，余り距らない時期と看做せば，図書の実際配架に対して，カード目録組織の部分的適用を試みた時を，デュイの大学卒業・専任副館長への就任後間もない頃とする上述“米国公共図書館報告書”の編者が執っている見解は，至って自然な解釈であるように思われる。さらにはまたデュイ自身が，その当初においては目録作製用に考案した彼の分類法を，図書や小冊子類に適用して，書架上に配架して見た結果，それが極めて有用であることを発見したと記しているその時期も，あるいはこの頃のことを指していると看做すことができるようにも思われる。

いずれにしても，このような実地の試みを経て，アマスト大学の図書蔵置形態は根本的に別の形を執る方向をたどるものになった。その間のいきさつについて，上記“報告書”の編者は，

---

19) 12)に同じ，p. 639
20) Dawe, G.G.: *Ibid.*, p. 321.

絶対的配架法（absolute location）は放棄され，図書は主題に従って相対的に（relatively）配架されるようになった。その主題はまず類（classes）によって，類の中は綱(divisions)，綱の中はさらに目(sections)という順序をたどって配列され，それらすべてに対しては番号と索引とが与えられる。そして新しく与えられた数字（0から999まで）が，旧来の書架番号（shelf number）にとって代り，かくて同一主題に関する図書は，蔵書がどのように増大して行こうと，つねに一しょに見出されることになった……

と記している。絶対（固定）式から相対（可動）式配架法への転換がそれであり，アマスト大学が，それへの端緒をとりあえず切り開いて行ったその事情に触れたものである。そしてデュイ分類法の発展と普及とが，それ以前においては普遍的であったほとんどすべての図書館における伝統的な配架方式を漸次変改して行ったことによって，それより前の時代を“図書館中世期”（*Library Middle Ages*）として区別するほどに，大きな歴史的意義を担うものとなったのである[21]。デュイの教え子の1人であるクローム（Mary Elizabeth Krome）が，‘1873年以前におけるライブラリー・エコノミーの歴史は，本当に真暗がりのままであったに違いない’[22] と述べているのは，デュイの分類法によってその暗やみを照らす新しい光がかかげられたという意味であり，その年を1873年としているのは，直接にはこの年提出された“起原論文”がその光源としての偉大な役割を担うことに言及したものである。

Ⅶ

デュイ自身は，この相対的配架という方法は，それが彼自身によって生み出され，従って全く新しい着想に出たものであるなどと主張する積りはなく，ただ強調しておかなければならないことは，この方法が偉大な利点と便宜とを保証するものであると共に，同時にその利便によって，旧来の方法が内蔵して来た大きな欠点を除去し得ることを発見した点であると述べている[23]。この言葉は実のところ，米国独立百年期に当る1876年の10月4日から6日にわたる3日間，フィラデルフィアにおいて，当時の主導的図書館人103名（登録者数）が参集し，7つの部会（session）に分れて意見を交換し，その結果アメリカ図書館協会の結成にもたらした，いわゆる“フィラデルフィア図書館人会議”（*Conference of Librarians at Philadelphia*）における討論の過程においてのべられたものである。彼が自分をもって，あえて相対的配架法の創始者，その首唱者と見なしているものではない旨を弁明しているその言葉は，おそらくは，プール（William F. Poole, 1821–1894）などによって，“可動式配架法”（movable location）という言葉のもとで，試験的にそれを試みたもののあった事績を想起してのことであろう。上記のペティは，デュイ分類法のもつ利点に言及した言葉の中で，その記号法（notation）に触れ，それが分類目録に対すると同様，図書そのものに対しても当てはめることができる点に特に力点をおいた記述を行った後，書架そのものではなしに，図書の方を分類するという“新しい考え”（new idea）は，すでに2・

21) *Library Journal*, Vol. 58 (No. 9), 1933 (May 1), *Editorials*.
22) Dawe G.G.: *Ibid.*, p. 180.
23) *Library Journal*, Vol. 1, 1876. p. 142.

3の進歩的図書館人の間においても，実地に試みられつつあったことを伝えている[24]。プールが1851年頃，まず“ソサィエティ・オブ・ブラザーズ・ユニィティ”(Society of Brothers Unity)の図書館において，後にはボストンの商業図書館(Mercantile Library)で実施に移したものも，彼のいう“可動式配架法”であり[25]，デュイおよびペティによる上述の言葉は，このような事績を意識してなされたものと思われる。しかしながらプールにおいては，彼が1856年“ボストン・アセニアム”(Boston Athenaeum)に採用したものは，逆に固定式配架法であった。そして後これを廃して可動式を採り，さらにその後シンシナーティ(Cincinnati, Ohio)ならびにシカゴ公共図書館長となるに及んで，この2つの図書館に対して可動式を導入したことが記録されている。すなわち可動式に対する先達的な役割を担うものであったことは事実であるが，しかしながらデュイのように固定式のもつ欠点・可動式の利点を明確に打ち出した上での，徹底した可動式の採用という段階にはいまだ到達しなかったものである。

可動式配架配法創始の問題はしばらく措き，旧来の配架法に対して“絶対的”(absolute)，新しい方法に対しては“相対的”という対照的な名辞を付して呼ぶようになったのは，おそらくデュイに始まるとみて差支えないであろう。このことは上記の“図書館人会議”の討論中でデュイが，‘図書配架の実際に，大きな相違点をもっている組織を鮮明にして行く必要上，相対的および絶対的という用語を使用する’とのべ，相対的配架法については‘われわれのシステム’などの表現を執っていることによってもその一端をうかがうことができる。

1876年デュイがアマスト大学を去ってボストンに赴いた後，その後任となり，大学では同級生であったとともに，終始変ることのない援助者でもあったビスコー(Walter Stanley Biscoe)が，1883年デュイに招かれて，彼のもとでコロンビア大学図書館の上級司書(Senior librarian)として赴任した後，アマスト大学の専任図書館長(1883—1911)となったフレッチャー(William 1. Fletcher, 1844–1917)は，1890年代にあっては，旧い配架方式はもはや一般的には放棄されて，新しいものに交替して行った事情について次のように記している[26]。

> 以前に広く行われていた実際，すなわ書架(shelves)を番号化し，特定の書架に所属するよう図書を指定して行く仕方は，新しい方法のために放棄されて来た。そしてこの新しい方法というのは，単にその書物が占める相対的順序(relative order)を指定するだけであり，従ってある書架が込み合って来るに伴って，書物は，いささかもその番号を乱すことなしに，どこまでも，一つの書だなから他の書だなへと移動させて行くことが可能である

と。そして彼はこの新しい方法に対して，‘書架上における“相対的”すなわち“可動的”配架法’という表現を与えている。マン(Margaret Mann)によると[27]，相対的配架法というのは，書物がたまたまその時おかれていた場所の如何にかかわらず，図書相互間の関係に従って配列さ

---

24) Pettee, J.: *Ibid.*
25) *Library Journal*, Vol. 6 (No. 4), 1881 (Feb.), p. 121.
26) Fletcher, William I.: Public libraries in America. 2nd ed. Boston, Roberts Brothers, 1895. Footnote 2. *Columbian Knowledge Series, No. 1.*
27) Mann, Margaret: Introduction to cataloging and classification of books. Chic., ALA., 1930. p. 47.

れて行く方法であり，あたかもカード目録の場合と同じように，無限に図書の繰り入れを可能にし，しかも請求記号の変更を要せずして，他の書架あるいは他の部屋への移動を許すものである。また固定式の方は，‘書だなと，図書記号 book marks との2つによって書物に記号を与え，かつ配列して行く方法であり，従ってその図書が，部屋の中・書架の区画（tier）中，さらには書だなの上に占める絶対的な位置（absolute position）は，つねに不変である’と述べている。

Ⅷ

固定式従って絶対式配架法についてなされて来た従来の説明は，その表現においても雑多であり，統一的なものをその中から求めることは到底困難である。ニーダム（C.D. Needham）はそれを‘きまった主題のために，ある書だなを確保しておく方法’である[28]といい，1943年米国図書館協会図書館用語制定委員会は

> 各図書に対し，特定の書だなの上で，決定的な位置が指定されるような図書館内における図書配列法。相対的配架法と対照的なもので，絶対的配架法（absolute location）とも呼ばれる

と記している[29]。ともに最も簡潔な定義に属するものであろう。そして後者の場合では，図書に指定される書だな上の決定的位置（definite position）をもとにして，その説明がなされている。もちろんここでいう書だな上の位置固定は，マンガ記しているように，さらには部屋の中・書架階層中における絶対的位置決定にも連なり，従ってこの方法による場合は，一度記憶された図書の所在位置が不変に維持されて行くことによる確認の容易，ひいては管理上の利便，さらには移動に伴う破損の防止など，それ自体として，また少なからざる長所をもつものでもあった。特に確認の容易という利点については，相対的配架法の全く企及し得ないところであり，デュイ自身，彼の分類法が，絶対式と対比した場合，この点における欠点はぬぐい得ないことを卒直に認め，次のように述べている[30]。

> 書だなや図書に数字を与えて行く普通の方法（common method）には当てはまらないわれわれのシステムには，ただ1つの欠点がある。すなわち普通の方法に於ては，例えば，この窓に一番近い書だなの端に今日置かれている書物は，正しくそれと同じところで，10年経った後においても見出すことができる。要するにその在り場所を記憶しておりさえすれば，こうした特別の場合でも，しかも暗がりの中でさえも，その書物を手にすることができるのである。これに反してわれわれのシステムにおいては，その書物と同一主題の他の書物が入りこんで来，ためにその書物は配列をこわした上で，新入図書のためにその席をあける必要が起って来，従って10年後，しかも暗がりの中でその書物を見出すという訳には行かないものである

と。ここでいう“普通の方法”というのは，いうまでもなく当時（1876年）一般に行われていた絶対式であり，また，“われわれのシステム”とのべているのは相対的配架法にほかならない。

---

28) Needham, C.D.: Organizing knowledge in libraries: an introduction to classification and cataloging. 2nd impression. Lond., Andre Detch, 1965. p. 95.

29) ALA Glossary of Library Terms. 1943.

30) Dawe, G.G.: *Ibid.*, p. 173–174.

デュイにおいては“固定式”（fixt system）は，‘書物が，昨日・今日・将来と，その永久に所属すべき類・綱・目に対してではなしに，たまたまその日，しかも偶然に位置することになった特定の部屋・書架階層，あるいは書だなに従って，それぞれに番号が付与されて行く方法’という言葉のもとで理解されている[31]。

以上のように，絶対式配架法に対してなされて来たその表現には，この方法に拠っている実態の相違をその背景とすることに起因するそれぞれに異ったものがあるとしても，“固定”・“絶対”の語によって代表されているように，一度指定された配架位置は，そのまま不動に存続して行く方法であるという点においては変りがない。ニーダムが，きまった主題のために，ある書だなを確保して行く方法であるとしているのも，これはむしろこの方法に準拠ている1つの様相を述べたものというべきであろう。クラーク（John Willis Clark, 1833–1910）がその著書中に付載し，それぞれの書架が，特定主題のために確保されている典型的なものとして提示しているのは，1610年に描かれたライデン大学（University of Leyden）図書館内部の図であるが，ここでは部屋全体を2列に区切り，左側には数学・哲学・神学の4主題に対して，書架がそれぞれ1・2・2・6個の割合で確保され，また右側には，歴史・医学・法律に対し，4・2・5の比率で，それが与えられている。結局合計22個の書架がここでは列べられ，およそ1,000冊の書物が，各主題のもとで、書架の前面にとりつけられている鉄の横棒に鎖でつながれている。いうまでもなくこの図書館は，いわゆる“*chained library*”にほかならないが，書架そのものに主題を付与し，その中においてそれぞれの図書が固定化されている好例を留めているものである。

もちろん一律に絶対的配架法とはいっても，その実態の上にはいろいろな相違がある。すなわちすでに触れた“数字配架法”を執る至って単純なものから，装丁の色別を基にし，それぞれに別個の書架を割り当てたもの，書物の大きさ（*folio, quarto, octavo, duodecimo*）に則した4系列を主体とするもの，著者あるいは書名の語順に書架の配分を行ったもの，さらには大雑把な主題にそれを割り当てたものなどがそれであり，デュイがアマスト大学において直接接し，それを基にして，絶対的配架法に対する深い思索をめぐらすようになったのは，すでに記したように，書架を至って包括的な主題に割り当てた上で，図書をその中に固定してしまう方法であった。

IX

ウィリアム・カッター（William Parker Cutter, 1867–1935）も記しているように[33]，デュイ分類法初版が刊行された1876年頃までは，アメリカの図書館において，書架上における図書の主

31) Dewey, Melvil: Decimal Classification beginnings. *Library Journal*, Vol. 45 (No. 4), 1920 (Feb. 15), p. 151–154.

32) Clark, John Willis: The care of books: an essay on the development of libraries and their fitting, from the earliest times to the end of the 18th century. Cambridge, the Univ. Press., 1901. *Fig. 69 (170–171)*

33) Cutter, William Parker: Charles Ammi Cutter. Chic., ALA., 1931. p. 40. *American Library Pioneers, III.*

題分類 (subject classification) に注意を向け，それを行う上に必要な分類法について考慮を払うが如きことはほとんどなかったといってもよい。事実この年刊行された前記の“米国公共図書館報告書”の中においても，分類法そのものについて言及したもの，また実際に用いられている分類表に関する記述は少なからず見受けられるにも拘らず，図書を書架上において，主題をもとに分類して行くその方法については，デュイを除き，それに詳しく言及しているものの存しない事をもっても，その一端をうかがうことができる。

デュイがこの“報告書”に寄せた“十進分類法と件名索引”と題する論文は，全文25ページ (p. 623—648) にも及び，1万3,000語を越える長文のものである。そしてその冒頭において彼は，‘アマスト大学図書館において実際に使用した通りのプランについて記述して行くことが，結局一番よい説明になるのではないかと考えられた’と記して，この年に至る過去3個年の実地適用の体験をもとにして，彼の分類法と相関索引について叙述して行く立場を執っている。すなわちデュイのものはこの“報告書”中においては例外的であり，その方法は，書架上における図書の配架位置を根本的に変革する“相対的分類表”であったことによって“革命的”な役割を担うものになったが，すでに考察して来たように，その起原に培った直接の動機は，むしろ目録にそれを適用することを意図したものである。“起原論文”は，彼の構想を始めて公にした文献であり，そのことによって1873年は，DC の誕生を告げた記念すべき年とされているが，しかしより直接には，当時におけるアマスト大学図書館の目録とその実情がその端をなし，ついでその絶対的配架法に及び，ひいては当時ほとんどの図書館において，採用されていたこの方法に対する深い省察を通じて，結局はその歴史的伝統的なものを根底から揺がす力に発展して行ったのがその真相であった。ドウ (G.G. Dawe, 1863-　) ものべているように[34]，デュイにしても，またその偉大な援助者であった上記のビスコーにしても，もともとその分類法は，ただアマスト大学図書館が直面していた問題を解決するために考案され，従ってそれが広く全世界にわたって採用されるなどとは夢想だにしなかったのがその実情であった。すなわちデュイの心は，アマスト大学の問題を解決し得たときに，始めてこの大学の実情 (Amherst situation) を乗り越えて，より広い世界に向って進んで行ったと看做すべきであろう。

X

デュイ分類法にまつわる課題は非常に多い。彼は晩年 (1920) その分類法の起原を回顧した一文の中で，いずれにしても図書分類法には，完全ということはあり得ないし，それは学問の進歩に伴って修正されて行かねばならない点について触れている[35]。デュイ分類法は，その創始から今日に至るまで，つねに改訂が加えらて来たとはいうものの，特に現代におけるその有用性をめ

34) Dawe, G.G. *Ibid.*, p. 167.
35) Dewey, Melvil: Decimal classification beginnings. *Library Journal*, Vol. 45 (No. 4), 1920 (Feb. 15). p. 153.

ぐっての論議は，いよいよ活発化しているのがその実情である[36]。しかしながら本稿は，そのような課題とは別に，その創始のもつ歴史的意義をまず明らかにしようとしたものに外ならない。

36) Taylor, Desmond: Is Dewey dead? *Library Journal*, Vol. 91 (No. 16), 1966 (Sept. 15), p. 3045–4037, 参照